

二〇一三年度春季企画展

「ペンから剣へ―学徒出陣70年―」

望 月 雅 士

二〇一三年度の春季企画展は、今年七〇年の節目の年を迎える学徒出陣をテーマとした。戦争の記憶の風化が叫ばれて久しい今日、その時代をできるだけリアルに描くために、学徒出陣で出征し戦死した五人の早大生を取り上げ、在学時代から出征、戦死に至る過程を戦争の推移のなかに位置づけることを試みた。

早稲田大学における一九四三年の学徒出陣者数はこれまで六〇〇名近くとされてきたが、今回の展示制作に伴う調査から、四五〇名以上と新たに算出した（当センター所蔵「本部書類（続）」中の「No.16『昭和一八年四月起 文部省関係書類 教務課（昭和一八年度）』」による）。なお戦死者数は、そのうち五〇〇名を超えると推定される。

本企画展の来観者は、三五二三名を数える。会期中間中、三月二五日のNHK首都圏ニュースで放送され、また「毎日新聞」三月二六日付、「岐阜新聞」三月二七日付、「毎日新聞」四月二五日付で、いずれも写真入りの記事で報道された。企画展終了後も、学徒出陣七〇年関連の記事として「毎日新聞」八月二一日付「記者の目」、「朝日新聞」一〇月二一日付社会面、毎日新聞十一月二日付「現代史探検」で取り上げられた。

2013年度春季企画展

ペンから 剣へ

—学徒出陣 70年—

2013年3月25日(月)～4月27日(土)

時間：10～17時（入場は30分前まで）

休憩：日曜日

会場：早稲田大学 早稲田キャンパス

会津八一記念博物館1階 企画展示室

入場無料

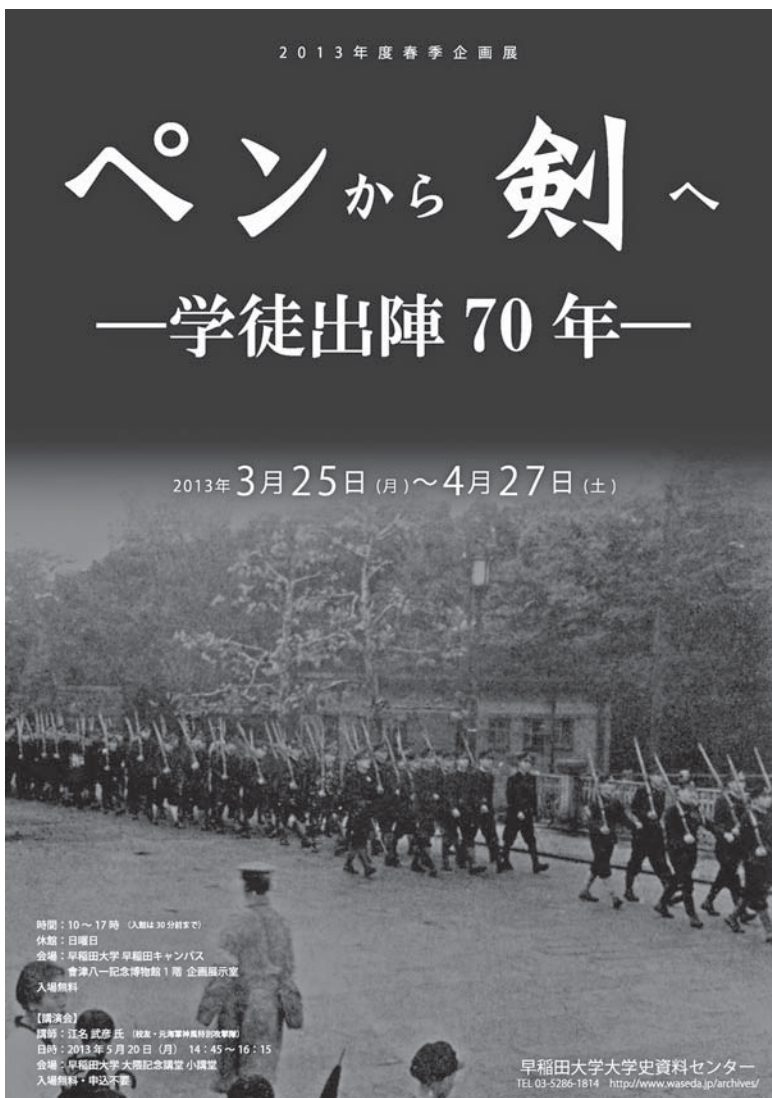
【講演会】

講師：辻名 武彦氏（作家・元海軍中佐特別少佐）

日時：2013年5月20日（月）14：45～16：15

会場：早稲田大学 大隈記念講堂 小講堂

入場無料・申込不要

早稲田大学大学史資料センター
TEL 03-5286-1814 <http://www.waseda.jp/archives/>

企画展に伴い、五月二〇日に大隈記念講堂小講堂で江名武彦氏の講演会「学徒出陣と特攻」を開催した。江名氏は政治経済学部一年の時に学徒出陣で海軍に進み、神風特別攻撃隊正気隊員として特攻出撃を経験された校友である。当日の講演会では、学生時代から特攻に至るまでのご自身の経験のみならず、友人たちの回想も交えて語られた。定員三〇〇人の会場は満席で、講演終了後の質疑応答では学生からの質問が相次いだ。時間が関係上、途中で打ち切らざるを得なかったことが悔やまれる。この講演会に関しては、「朝日新聞」一一月一五日付で取り上げられた。

なお本展示に関しては、一〇月一〇日の全国大学史資料協議会全国研究会で、「大学史における戦争展の試み」『ペシから剣へ—学徒出陣七〇年—展を通して—』と題し、制作の過程および意図などについて報告した。この報告の内容は、同会編『研究叢書』第一五号（近刊）に収録される予定である。

〔付記〕 市島保男の遺品類は、企画展終了後、ご遺族より寄贈された。心よりお礼申し上げます。

はじめに

今年、いわゆる学徒出陣から七〇年にあたる。

太平洋戦争が敗色の様相をみせる一九四三年一〇月、学徒に認められていた徴兵猶予が停止された。これにより陸海軍へ入隊した学徒数は全国で九万、あるいは一三万と言われ、早稲田大学からは四五〇〇名を越す学徒が出陣した。すでに一九四一年から繰上げ卒業が実施されており、翌四四年には徴兵年齢が下げられるとともに、第二陣の学徒が出陣していった。その年の秋、学徒の消えた早稲田の光景を、文学部の女子学生だった堂園満枝は三二文字に詠んだ。

征く人の ゆき果てし校庭にに 音絶えて

木の葉舞うなり 黄にかがやきて

今回の企画展では、学業半ばで陸海軍に入隊し、戦場に逝った五人を取り上げる。彼らの知性は戦争の時代といかに向き合い、格闘したのだろうか。彼らの軌跡を追うことから戦争の姿を改めて問い直し、不戦の誓いを新たにしたいと思う。

一 遺書・最後の手紙

高木多嘉雄

- 一九二二年 一月 八日 東京府生
- 一九三九年 三月 東京府立第九中学校卒業（現・東京都立北園高等学校）
- 一九四〇年 四月 一日 第二早稻田高等学校入学
- 一九四二年 四月 一日 早稲田大学政治経済学部入学（一九四四年九月二五日卒業）
- 一九四三年 二月 一日 東部第六部隊入営
- 一九四四年 五月 一日 前橋陸軍予備士官学校入校
- 一九四四年 九月 二七日 第十四方面軍教育隊転属
- 一九四四年 十一月 二日 フィリピン・マニラ着
- 一九四五年 一月 二二日 見習士官任官

一九四五年 二月一八日 第十四方面軍教育隊卒業 第十九師団転属

一九四五年 三月三〇日 フィリピン・ルソン島キャンガンにて戦死（靖国神社「祭神之記」による。なお、『前橋

陸軍予備士官学校第十一期生記録及名簿』では、一九四五年三月二〇日ルソン島ソラノで戦死とある）

遺書

「遺書

日本に生を稟け此所に二十三年。

始めて日本本土を離れ、米軍撃滅の為出發す。

米軍の勢力極めて大なり。故に何時敵の洗礼を受くるやも知れず。此所に日頃の修養を述べて遺書となす。

生れて現在迄常に暖き父母の慈愛のもとに純に成育し、今日迄深く感謝の日を送りぬ。然れども戦運我に利非ずして学校中途にして南方に向はんとす。

我性来温順なりと雖も常に心の奥深く考へ、今日の幹部候補生を見るに誠に員数に等し、之を脱すべく自己修養に努め自らの矜持を持ちたり。即ち我の如き幹部候補生に非ずば将校たるの資格なしと。

斯に我は日本の将来を憂ふ。即ち日本に優秀なる中堅幹部の余りに少き故になり。然れども現在之を悲感する時ならず、宜しく良き指導のもとに優秀なる幹部を養成すべきなり。

一九四四年九月 新谷照氏寄贈 大学史資料センター所蔵

斯く考へ自己の責務の重大なるを思ひ、真に皇国に奉ずるの時至るを思ひて喜なり。この体力と氣力とを持ちて益々努力、幹部候補生の模範たらんとす。

愈々殉国の時に於て父母に潔く現在迄の不孝を許して戴くと共に、散りゆく若木を立派に見送つて下さい。

自分は長男として常に不孝ならざる如く注意し成育し来る共、無理を云ひて困らせる時もあり。今此所に別れるに当り二度見る能はざるを思ひ、深く詫びる次第なり。例へ我死すと雖も高木家を立派に残し、益々隆盛ならしめて下さい。

自分は始め家を思ひ、国を思ひて非常に悩む。然れども国を憂ふる切なれば、国建てて家あり、依つてこの国難に方り此の一身を捧げて国に尽し、輝しき将来を見出さんとす。

父、母様共に御壮健にされ、残る良治、照子、美子を指導しつつ、自分の立派なる手柄を待つて居て下さい。」

柳田喜一郎

一九二二年二月二日 東京府生

この間不詳

一九四二年一〇月 一日 早稲田大学商学部入学

一九四三年二月 一日 東部第六十三部隊入営

一九四四年 五月 一日 前橋陸軍予備士官学校入校

一九四四年 九月一七日 第十四方面軍教育隊転属

一九四四年一月一日 フィリピン・マニラ着

一九四五年 一月三十一日 見習士官任官

一九四五年 二月二十八日 第十四方面軍教育隊卒業 第百三師団転属

一九四五年 四月一〇日 フィリピン・ルソン島サラクサクにて戦死

最後の手紙

「拝啓

箱崎神社に啓で、外敵撃滅を誓ふ。

省みるに武人として淡々たる心境にて出陣する時、自ら烈々たる敢闘の熱血が全身に漲るを覚ゆ。武者振ひと云ふが、誠に決死の状況に臨むとき自づと全身打震ふものである。

博多にて東京の思影を忍び、思ひのまゝに飲み食ひせるも、腹ふくるに至るとき、故郷我が家のことが必々と胸中にこたへ来て、わびしさ限りなし。

前橋の生活は悪夢の一駒としか思はれぬ。然し常に念頭にありくと光り輝くものは、我が家に在りし日の事どもなり。父の姿、母の姿、毎朝夢醒むるとも脳裏に浮かぶなり。二十有余年の間、誠心を持ちて我を育て給へる親の思の如何に尊きものなるかは云ふに及ばざるも、父に報ゆるの吾が努力の小さき事のみ、我が胸を締めつけるなり。父母よ、許し給へ、吾れ何等為す無くして出で立つとは。

一九四四年九月二五日

大学史資料センター所蔵

然し吾は帝国軍人として一劍、以つて国家の干城と為り、君に忠節を尽し奉らん。吾任務本分に唯一路邁進せんのみ。忠孝一本を吾が信念となし、潔きよく征くなり。

伊勢の大廟、檀原の宮に吾が決意を誓ひしより、早や一年なり。秋晴れの神域を母と肩をならべて歩みし事は今尚ほ記憶新なり。奈良の三笠山に登り、遙かに東大寺の本堂を眺め、昔の榮華を語り、或は清水寺に平安神宮に昔の宮人達の優美な姿を語り合ひし事等、母の姿に結びつき、次々と思ひ出さるなり。

榛名山、相馬ヶ原、雨に煙る日、面会に来れる人々の顔が一つ一つ印象的に浮んでくる。出発の前日、父と別れし時の思ひ、特に深きものあり。

然し今は唯々明鏡の如き清明淡々たる心境なり。

思ひは多けれど、今は一切を滅す。「心頭を滅すれば火も亦涼し」と云ふ。偉大なる神を信じ、運命に身を委かせ、大海に乗り出ださんとするなり。

然し、然し、吾は父母の絶大なる恩愛を滅す能はず。

何よりも吾は父母の慈愛を信ず、是れ神を信ずるに何等異なるなし。

父母への絶対感こそ、神への帰依なるを悟れり。偉大なる父母の恩愛なり。吾は是を信ずればこそ、勇躍難に赴き得るなり。真理とは何ぞ。主客統一せる調和の状態なり。感性、悟性、理性を綜合調和せるものは是れ真理なり。是れを

父母の恩愛に対する絶対感に吾々は見出せり。

日本皇道の哲理は忠孝一本を前提となし、真理を父母と其の子弟との間に於ける主客合一にこそ求むべきであらう。

シンガポールへ、或はマニラへ、南の国へ吾は行くなり。夢の国へ。何処へ行くとも吾は忘れじ懐しの我が家を。父母よ、吾れを忘れ給ふな。

身はたとへ消ゆるとも、吾が心は必ず父母の許へ駆け戻らん。

千軍の戦なりとも言挙げせで 取りて来ぬべき男ぞと思ふ

綿々たる私情に捉はれ、斯迄書き来れど、我は青年武士たるを思ふ時、余りにも言葉多きを恥かしく思ふ。母に甘へし意久地なしの青年武士と笑ふて下さるな。今は皇国の一武士なり。銃を荷ひ、腰に日本刀をたばさみ、眼鏡を吊り、颯爽と行進する吾等の英姿を想像し給ひ。

では、元気に頑張れ、青年武士の名を恥づかしめざらんことを期す。

出陣の日

喜一郎 不二

吉村友男

- 一九二二年 三月 一日 岐阜県生
- 一九四〇年 三月 東海中学卒業（現・東海高等学校）
- 一九四一年 四月 一日 第二早稲田高等学院入学
- 一九四二年一〇月 一日 早稲田大学文学部国文学科入学
- 一九四三年二月 一日 中部第四部隊入営
- 一九四四年 五月 一日 中部軍教育隊入隊
- 一九四四年 九月 第四航空軍司令部転属
- 一九四四年一〇月一八日 フィリピン西方海上にて戦死

最後の手紙（断簡）

姉宛 一九四四年九月頃 わだつみのこえ記念館所蔵

「貯金通帳は現地へ持って行っても役にたゝぬので、家へ返すつもりでしたが、考へて、姉上にさし上げる事にします。たゞし、注文があります。

この金は、美学、美術関係の書物を買ふ時にのみ使ふ事。僕の意味するところ、解つたであらう。

少しはまとまった金故、考へて、いゝ本を買つて勉強してくれたまへ。そして、この金で買った本には、記念のため、その旨記してをいってくれ。ガイセンして、その本を（以下欠落）」

近藤清

- 一九二〇年 八月二七日 岐阜県生
- 一九四〇年 三月 岐阜市立岐阜商業学校卒業（現・岐阜県立岐阜商業高等学校）
- 一九四〇年 四月 一日 第二早稲田高等学院入学
- 一九四二年 四月 一日 早稲田大学商学部入学（一九四四年九月二五日卒業）
- 一九四三年二月一〇日 大竹海兵团入団
- 一九四四年 二月 一日 第十四期飛行専修予備学生として土浦海軍航空隊へ配属
- 一九四四年 五月二五日 出水海軍航空隊へ転属
- 一九四四年 九月二八日 名古屋海軍航空隊へ転属
- 一九四四年二月二五日 海軍少尉任官
- 一九四五年 四月二八日 神風特別攻撃隊第三草薙隊員として沖縄海上にて戦死

遺書

「姉上様

加藤三郎少尉はじめ諸先輩に続ける日が近くに参りました。

闘志満々その好機を待つて居ります。

こちらに来て早速出撃の筈でしたが、不覚や今日まで生きのびて了りました。

平井しげ宛 一九四五年四月

近藤幸義氏所蔵

永い間随分可愛がつて戴いて本当に感謝して居ります。

この度東京で佐野さんと一緒に色々お世話になった市川八百蔵氏（新鋭歌舞伎）の娘さんが岐阜に疎開されてこられたそうです。

この娘さんは姉妹二人下の妹さんで、会社の都合でこの妹さん（せい子さん）一人が来られたので寂しがって居られるさうです。家に帰られた時は寄つてやつて呉れとお手紙戴いたのですが、私が名古屋を張切つて出たあとの事ですので姉さんにお願ひした訳です。

本名は「喜熨斗せい子」さんです。

佐野さんともよくお知合です。小生東京にゐたとき、この喜熨斗さんには非常にお世話になりました。

せい子さんがお一人で寂しいことでしょうか、◎御不自由のないやう出来るかぎりのことはして上げて下さい。私は最後のくまで姉さんには御無理言ひますが、よろしくお願ひ致します。

宿舍会社のあるところは、東京のせい子さんの姉さんから知らせて呉ること、思ひます。

訪ねて行つて家へよんで御馳走でもしてあげて下さい。

呉々もお願ひ致します。

皆様の御多幸を祈ります。

つた子、ちゑ子、久子、照ちゃん、仲よく元気でやりなさい。

こちらに来て撮った写真同封しました。
母に渡して下さい。

では元気で征きます。

近藤少尉

姉上様

追伸

照二君

君のお母さんから買って貰った俺の軍刀は照二君に渡す。

あれを力一杯ふるって俺の後に続いて呉れ。

あくまで明朗に張切ってやりなさい。」

市島保男

一九二二年 一月 四日 神奈川県生

一九四〇年 三月 神奈川県立横浜第二中学校卒業（現・神奈川県立横浜翠嵐高等学校）

一九四〇年 四月 一日 第二早稲田高等学院入学

一九四二年 四月 一日 早稲田大学商学部入学（一九四四年九月二五日卒業）

一九四三年二月一〇日 武山海兵团入団

一九四四年 二月 一日 第十四期飛行専修予備学生として土浦海軍航空隊へ配属
 一九四四年 五月二五日 谷田部海軍航空隊へ転属
 一九四四年二月二五日 海軍少尉任官
 一九四五年 四月二九日 神風特別攻撃隊第五昭和隊員として沖縄東南海上にて戦死

遺書

「父上 母上

父母宛 一九四五年四月二〇日 大学史資料センター所蔵

思へば廿四年間、私の如き至らぬ者を比すべきものもなき大なる愛情を以て育んで下さった御恩、何と御礼してよいかわかりません。苦勞を御掛けし通しで何にも報ゆる事の出来なかつた事を何卒御許し下さい。

併し此の上なき御両親、弟妹に囲まれ、美しき青春を送った保男は実に幸福者でした。

今、国の危難に臨み身を以て護国の鬼と化する時、祖国の栄えを願ふ外、思ひ残す事は何もありません。

御両親から頂いた儘の清い身心をその儘大君に奉り、桜花と共に南海の空に美事咲きます。

私の身体は粉となるも精神は永久に生き、すべての人の魂に甦へります故、御両親も笑って私の出陣を送って下さる事と固く信じてをります。

今や生に何等の執着もなく、只使命の完遂を祈る静かなる心境は我ながら不思議な位です。

立派な御両親に応はしき子として最後を飾るべく全身全霊を挙げて努力します。

有り難う御座居ました。征きます。

二 ワセダでの日々

一九三七年七月盧溝橋事件を機に始まった中国との戦争は果てしない泥沼の戦いとなり、「非常時局」の下、文教政策においても戦時体制の推進が要請されるようになった。早稲田大学では田中穂積総長の指揮により、訓示、科外講義、映画上映、神社参拝、慰問、恤兵金など、戦時国策に直結した時局認識と戦意昂揚の育成を熱心に推し進めていった。一九四〇年には国是即応・体力錬磨・集団訓練を綱領とする学徒錬成部を設置し、新人生に向け智徳体兼備の人材錬成をはかったが、これは文部省に設立される国民錬成所の先駆けとなった。

高木多嘉雄、近藤清、市島保男は一九四〇年に第二早稲田高等学院に入学した。市立岐阜商業出身の近藤は全国中等学校野球大会で優勝と準優勝の経験をもつ、注目のルーキーだった。敬愛する岐阜商の先輩松井栄造の後を追って野球部に入った近藤は、一九四二年春季の東京六大学リーグ戦で四割二分五厘の打率をたたき出し、慶應の別当薫に続く二位の好成績を収めた。続く秋季リーグでも打率三割六分八厘の成績を残し、六大学リーグを代表する選手へと成長していった。

市島は文学を愛した。勉学に勤しむ日々を送るとともに、航空部に所属しグライダーに乗った。友と語り、映画を楽しみ、旅をした。学院二年時に、日本基督教団桜教会で洗礼を受けた。「本来の人間の醇美を得んと思えどその

難きに逢着して行き悩みあり。ここに於いて始めて神という意識の生じ来れる也」、市島は信仰の芽生えをこのように日記に書いた。

市島保男「学園風景」

一九四〇年五月

「青空と緑の木々に引き立てられているクリーム色の近代的な建物大隈講堂の時計塔、美しい鐘の音、これらは全て我らが学園の象徴である。そしてこの学びの殿堂には、万余の若人が青春を謳歌しているのだ。我ら学生は社会の闘争に対し準備し、亦現実には激しくぶつかって行こうとしている。そしてそこに貴い火花―生命の燃焼―が生ずるのである。生命の燃焼、これは人が真面目な態度でぶつかっていく時に生ずるのであって最も真摯な生活態度なのである。そのときそこには明るい未来が開ける。そしてこの機運が学園に漲ったとき、目には見えないが最も素晴らしい風景が展開されるのだ。」（市島保男遺稿集）

〔展示資料〕

○近藤清「夏休の日記」

一九三六年七月二〇日～八月三十一日 近藤幸義氏所蔵

岐阜商業二年生時の「夏休の日記」。甲子園制覇へと至る日々の練習と、甲子園での試合にのぞむ心情が綴られている。

○第二十二回全国中等学校野球大会優勝メダル

一九三六年八月 近藤幸義氏所蔵

○近藤清「アルバム 早稲田大学時代」

近藤幸義氏所蔵

○一九四二年秋季リーグ優勝記念盾

一九四二年 近藤幸義氏所蔵

○早稲田大学学帽 市島保男着帽

大学史資料センター所蔵

市島保男「妄言」

一九四二年四月

「…友は大きく笑いながら銅像を見上げた。大隈さんは相変わらず虚空を見つめている。僕も大隈さんの顔をジッと見た。大きな口は堅く閉ざされ静かな陽光が斜め後ろから注いでいる。何万もの先輩が、中には偉大な先輩が青雲の志しを抱いてこの像を眺めたことだろう。しかし時代は変わり、人も変わり、今我々が彼を仰いでいる。彼は変転極まらない時代の潮流も知らぬげに現在ここに立ち、またどれほど長く、そして激しく青年

—我々の後輩—の心に何物かを呼び起こさんとするのだろうか。：：」（市島保男遺稿集）

三 学徒出陣—校門から宮門へ—

一九四三年九月二日、東条英機内閣は国民動員徹底の一環として、学徒の徴兵猶予停止を決定、一〇月二日公布の勅令で、満二〇歳に達している学徒は徴兵検査を受け、一二月早々に陸海軍へ入営・入団することが決まった（大
学学部生の場合、一九二〇年四月二日～一九二三年二月一日生まれの者が対象）。早稲田の場合、徴集延期となった理工学
部などの学生を除き、その数四五〇〇名を超え、文科系四学部では七割近くの学生が対象となった。

高木多嘉雄は政治経済学部三年となった。とにかく勉学に励んだ。一方で剣道をはじめ、水泳やスケートも楽しむ
など、文武両道の学生生活を送っていた。学徒出陣が決まった時、神風が吹くことを信じていた父に、高木は大学生
が行っても誰が行っても、勝てる戦争ではないと言った。

吉村友男は一〇月、文学部国文科二年に進んだ。読書に親しみ、文芸評論や小説の創作も手掛けていた。羽仁五郎
の『クロオチエ』を読み、感銘した。「自分の学問を信じあくまで現代を批判」するイタリアの哲学者バクローチエ
に、学者としてのあるべき姿勢を見たのである。

〔展示資料〕

○文部次官「在学徴集延期停止に関する件」

早稲田大学総長宛 一九四三年一〇月二日 大学史資料センター所蔵

勅令第七五五号在学徴集延期臨時特例、および陸軍省令第四〇号昭和一八年臨時徴兵検査規則にもとづいて、文部省は各官公私立大学（総）長等に通牒を發し、徴兵署開設は一九四三年一〇月二五日から十一月一五日までとし、徴兵検査は本籍地で行うことを伝えた。

○文部次官「昭和十八年臨時徴兵検査を受くべき学生生徒の取扱に関する件」

早稲田大学総長宛 一九四三年一〇月一九日 大学史資料センター所蔵

入営・入団の学徒に対しては、一九四四年九月卒業見込みの者には一九四三年一月仮卒業証書を授与し、翌年九月に卒業させることとなった。

○菊池豊三郎文部次官「朝鮮人台湾人学生生徒に関する件」

早稲田大学総長宛 一九四三年一〇月三〇日 大学史資料センター所蔵

一〇月二〇日陸軍省令第四八号で朝鮮と台湾に本籍を持つ学徒の特別志願兵制度が定められた。「内地人学生生徒と同様の取扱をなさんとする趣旨に有之：朝鮮人台湾人学生生徒に対しては自ら進んで洩れなく志願する様御慇懃相成度」とある。

○教練検定合格証明書 高木多嘉雄

一九三九年三月三日 東京府立第九中学校配属将校陸軍歩兵大佐 新谷照氏寄贈 大学史資料センター所蔵

○第一学年・第二学年野営演習計画

一九四二年 新谷照氏寄贈 大学史資料センター所蔵

南軽井沢教練場での野営演習計画書。

○早稲田大学政治経済学部学徒国民貯蓄組合規約

新谷照氏寄贈 大学史資料センター所蔵

第一条に「本組合は国民貯蓄の重要性に鑑み、全学一致して戦時貯蓄の実行に力め学徒として財政経済的方面より大東亜戦争完遂に協力するを以て目的とす」とある。

○高木多嘉雄筆記 政治経済学部講義ノート

新谷照氏寄贈 大学史資料センター所蔵

○徴集延期証書 高木多嘉雄

新谷照氏寄贈 大学史資料センター所蔵

○早稲田大学学生証 一九四四年度 吉村友男

わだつみのこえ記念館所蔵

○吉村友男書翰 家族宛

一九四〇年九月 わだつみのこえ記念館所蔵

「…上京して来た日に、ちよつと淋しくて泣けたが、ここに移つてからは山地もあるし、よく眠ります。それに、少しなれて落ちついて来ました。自分の家が如何にいいかは、石で叩かれた様によく解つたし、家に居た自分が如何にルーズで我まま勝手であつたかも反省できた。小生、これから少し方向転換するつもりです。海に出てみて、はじめて陸の有りがたさが解る様なものだ。

道を歩んでみると、「そうなのよ」とか、「よしてよ」とか、「ね、さうなんですネ」とか、びつくりする程キレイな言葉を使つてゐるので、どんな上品な小供かと思つて振り返ると、なに、きたない小僧で、馬鹿らしいと云ふよりシヤクにさはつて来る。

昨日と一昨昨日、銀座へ出たが、昨日などはえらい人出だった。今思ひ出したが、戦争といふ意識がちつとも起らなかった。あ、そうだ、日本は今、戦争中だと思ふ。…」

○吉村友男書翰 家族宛

一九四一年四月二日 わだつみのこえ記念館所蔵

「昨日早稲田発表之れあり、合格仕りました。…東京外語はだめであります。しかし、まけおしみのやうであります。やっぱり大学をでておらねばはなしにならず、兵役の方もそんであります。それに闊といふものがありまして就職の方も、ワセダの方がよいのであります。…これからは、専門学校ではだめで、大学をでなければ上にはなりません。名古屋高商や名古屋高工などへはいつて、早稲田よりえらいように、名古屋の人はおもつてますが、そ

れはおおまちがひだとわかりました。…」

○吉村友男書翰 家族宛

一九四一年四月 わだつみのこえ記念館所蔵

「…みなさん元気ですか。

早稲田の学生になって、もう一週間たちました。新しい帽子や、てさげカバンや、あみあげ靴などで、このごろはすこしばかりワセダニアンらしくなったやうです。…

新聞にも出たやうに、今年から新体制で授業は午前四時間だけ。午後は特修科といって、自分の好きなものを自由に研究するといふ仕組みです。教練は一週に二時間、火曜日の午后にあり、水曜日の午后に、一時から五時頃まで練成といつて、二里もはなれた東伏見といふ山の中へ電車でいって、運動や草とりをするのですが、聞いたところは、いかにも結構なことですが、実際はみんな嫌がつてあます。教練はこの学校へいってもやること故、仕方がありませんが。…」

吉村友男 羽仁五郎『クロオチエ』（一九三九年）を読んで

「クロオチエの偉いところは、学問を信じ多くの人のために尽すということを考えていたことだと思えます。

学問の独立という言葉があるけれどもそれに徹するということはたいへんむずかしいことだと思えます。クロオチエという人はほんとうにそれを信じそれを守った人でした。平和な時は空論も空論と見えないものだから、学問の独立というような言葉もずいぶん繁昌したけれども、現代のような異常な時代になると、空論なん

か出る余地がなくなり、みんなあまりそういうことを言わなくなりました。もともと本気で言っていたわけではないでしょうからあたりまえだけれど、たいへん情けないことだと思います。

クロオチエの偉いところは、その議論というより、そういう時代にもなお、ビクともしない彼の学問的信念だと思います。」（『新版 きけわだつみのこえ』岩波文庫）

一〇月一五日、早稲田から出征する学徒のための壮行会が、戸塚道場（現・総合学術情報センター）で開催された。立ち並ぶ学徒たちを前に田中穂積総長は、「今こそ諸君がペンを捨てて剣を取るべき時期が到来した」と訓示した。壮行会終了後、出陣学徒たちは各学部ごとに報国碑まで行進、さらに一〇〇〇名の学生が靖国神社、皇居まで行進し、敵の撃砕を誓った。

翌一六日には早慶壮行野球試合、いわゆる最後の早慶戦が催された。直前まで開幕が危ぶまれていたが、戸塚道場は早慶の学生で埋め尽くされた。近藤清は三番レフトで出場し、三打数二安打二打点の活躍で勝利に貢献した。一九四三年に入り、東京大学野球連盟が解散に追い込まれても、近藤は「野球道」の精神に則り、対外試合はなくとも日々練習に励んでいた。そして五月の松井栄造の戦死に際しては、岐阜の恩人に「必らず仇をとります」と書き送っていた。

〔展示資料〕

○西条八十「全日本学徒の出陣を送る」

『蠟人形』一九四四年一月号 大学史資料センター所蔵

当時早大教授だった西条八十は、出陣していく学徒たちに詩を送った。

「…見よ凄涼として血潮流るる南北の空、大東亜十億の民族の運命を岐つ世紀の決戦は迫れり。解放か、奴隸か、楽園か、牢獄か、今にしてこの回天の聖業を支へ得るはたゞ若く、逞しき者の腕のみ。卿等、皇国の明日を担ふペンを抛げ、書を閉ぢて、奮然、今日のために劔をとる、すなはち腕を敲いて叫ぶ、『我等起たずして、誰人か世界の正義を支ふる?』ああ、よきかな、この誓、これぞ、猛然太平洋を席卷する昭和の神風ならずして何ぞや。往け雄々しの若人、断じて苟且の生死を意とする勿れ、…」

田中穂積早稲田大学総長 出陣学徒壮行会に於ける訓辞

一九四三年一月十五日 於戸塚道場

「今こそ諸君がペンを捨て、劔を取るべき時期が到来した…征け諸君！悠久限り無き時の流れの上から見れば誠に信長の歌った通り、人間僅に五十年、…大君の御楯となつて、興亜の大業に参加し、その礎石となると云ふことは、誠に価値高く意義深き事柄であつて、私は諸君の勇戦奮闘、武運の長久を心から念願し、他日諸君が勝利の栄冠を戴いて再び学園に還る日を鶴首して待つものであるが、然し乍ら、勇士は出陣に當つて固より生還は期すべきでない。…」〔早稲田学報〕一九四四年一月号。

一〇月二二日、文部省学校報国団主催で出陣学徒壮行会が明治神宮外苑競技場で開催され、東京およびその近県の二万五〇〇〇人と推定される出陣学徒が集結した。スタンドには推定六万五〇〇〇人の送別学生が見守り、東条英機首相らが壮行の辞を述べた。式典の後、早大隊の中からは「都の西北」の合唱がわき起こり、スタンドから女子学生が隊列に駆け寄る光景が見られたという。

市島保男はこの壮行会に行かなかった。その理由を友に次のように書いた。「何故学生のみがこれほど騒がれるのだ。同年輩の者は既に征き、妻子有る者も続々征っている。我々が今征くのは当然だ。悲壮だというのか。では妻子有る者は尚更だ。学生に期待する故と言うのか。では今迄不当な圧迫を加え、冷視し、今に至り一変するとは」。

一〇月二五日からの徴兵検査が迫る中、学生たちはそれぞれの故郷に戻っていった。名古屋へ帰る吉村友男は東海道線の道中、富士山がよく見えたもののミカンの販売がなかったことをもじり、「富士（不死）は見事に見え申し、ミカン（未還）は一つもこれ無きとは、何たる上廻んぎに候か！お察し願ひたく候」と姉に書き送った。

学徒出陣の発表で慌ただしく過ぎ去る日々の中、最上級生は一月三〇日付の仮卒業証書を受け、生徒たちはそれぞれ陸海軍へ一斉に入営・入団していった。

〔展示資料〕

○近藤清「仮卒業証書」

一九四三年一月三〇日 近藤幸義氏所蔵

○吉村友男書翰 宛先不明

一九四三年一月 わだつみのこえ記念館所蔵

「いよいよ、めでたく十二月一日、岐阜の歩兵聯隊へ入隊致すことになりました。御期待に背かぬやう、一生懸命、働いてまいる決心であります。では、全国民戦闘配置に着きつつある折から、ますますお元気で、心に太陽を持ち、くちびるに歌を持ってお働き下さいますやう、おいのりいたしてをります。さようなら」

四 軍事訓練

陸軍に進んだ高木、柳田、吉村は二月一日に入営、高木は東部第六部隊（東京）、柳田は東部第六十三部隊（山梨）、吉村は中部第四部隊（岐阜）に配属となった。二月一日入営に際し、王子神社で見送りに来た人々を前に高木は、国土が戦場になる可能性があるかと挨拶し、周囲を驚かせた。翌四四年二月、陸軍に進んだ三人はともに幹部候補生に採用され、五月高木と柳田は前橋陸軍予備士官学校へ、吉村は福知山の中部軍教育隊へ入った。

一方、海軍へ進んだ近藤と市島は、一九四三年二月一〇日に海兵団に入団、翌四四年二月一日、第十四期飛行専修予備学生とともに土浦海軍航空隊へ配属、五月二五日には市島は谷田部、近藤は出水の海軍航空隊へ転属となった。操縦専修の近藤と市島は、厳しい飛行作業を続けていた。

戦局は一段と悪化した。一九四四年七月、サイパン島の日本軍が玉砕した。絶対国防圏が崩壊し、日本軍はフィリピンへの兵力集中をはかった。フィリピンがアメリカ軍に奪回されれば、日本と南方資源地域の海上輸送線が遮断され、日本の戦争遂行は絶望的になるからであった。前橋の高木と柳田は卒業を待たずに、五五〇名の同期とともに第十四方面軍教育隊へ転属となり、吉村も南方派遣が決定した。いずれもフィリピン戦へ投入されたのである。

新谷照氏談（高木多嘉雄実妹）

両親とともに東部六部隊の兄に面会に行ったことがあります。兄はとんかつが好物だったため、母が帯の中

にとんかつを隠して持って行き、差し入れていました。兄はそれを汲み取り式の便所の中で食べていました。そして便所の前では、父が立って見張っていました。

〔展示資料〕

○吉村友男書翰 姉宛

一九四四年 わだつみのこえ記念館所蔵

「東京もこのごろは大へんだらう。空襲の用意はよいか。：
では、現代唯ひとりの文化継承者よ、外界に負けず、一生懸命勉強してくれたまへ。今でも時々、夢殿の美しさが、ミロクあのなめらかな微笑が僕の胸をよぎるのだ。また出す。」

新谷照氏談（高木多嘉雄実妹）

前橋陸軍予備士官学校を終える頃、成績のよかった兄に、陸軍中野学校への推薦の話がありました。しかし中野学校へ入校するには籍を抜かねばならず、高木家を守ることに強い意志をもっていた兄は、その入校を断つたと前橋への面会の際に告げられました。

五 戦場

一九四四年一〇月一八日、フィリピン西方海上、吉村の乗り込んでいた輸送船がアメリカ軍の魚雷攻撃を受け沈没

した。レイテ島にアメリカ軍が上陸を開始する二日前のことだった。海へと沈みゆく吉村の最期を知る手掛かりはない。

一方、高木と柳田は九月一七日に前橋を出発、十一月一日にマニラに入港したが、レイテ沖海戦の敗北で、すでに日本海軍の連合艦隊は壊滅し、食糧や弾薬の輸送も困難な状態に陥っていた。

翌四五年一月アメリカ軍のリングエン上陸に伴い、日本軍はルソン島北部への転進を開始した。山岳地帯に兵力を集め、持久作戦を採ったのである。第十四方面軍教育隊も北部へと移動を開始、アメリカ軍が迫りくる二月、教育隊の卒業を機に高木は第十九師団（虎兵団）へ、柳田は第百三師団（駿兵団）に転属となった。

高木は第十九師団へ向かっていた。だが山岳地帯に陣を構える師団へ行くのに地図はなかった。食糧もほとんどなかった。キャンガンまで達した時、高木はアメリカ軍戦闘機による機銃掃射を受けた。三月三〇日のことだった。

柳田を待ち受けていたのは、サラクサク峠をめぐる攻防戦だった。アメリカ軍との激戦が続いた。柳田は機関銃小隊長として昼なお暗き密林地帯の溪谷を、磁石一個を頼りに戦った。四月一〇日戦闘の最中、柳田の頭部から顔面に銃弾が貫通した。

訓示 比島派遣第十四方面軍教育隊長 陸軍少佐 松野博

比島派遣第十四方面軍教育隊第一回卒業式

一九四五年二月一八日

「本日茲に第十四方面軍教育隊第一回卒業式を挙行し、幹部候補生第十一期生諸子を国軍幹部として列するを得るは、本職のまことに欣快とする所である。…しかしながら今日この比島戦に於て、真に肝要にして効果を

期し得るは肉攻、斬込み、築城の三戦法あるのみ。爆雷を抱き敵戦車の下に身を挺し、自らの犠牲と共に、敵戦車を破壊す。夜間、小部隊を以って敵陣を襲い、小火器、白兵をもって敵兵を殺傷す。或ひは時至るまで、熾烈なる敵の砲爆撃を避け堅忍持久を図るため周到なる築城をもって待機す。この戦法のみ、現下に於ける喫緊の要にして諸子は既にこの三戦法に充分なる習熟を卒させて居り、爾余の訓練は至らざるも不要と云うべし……」(『前橋陸軍予備士官学校戦記』)

一九四五年三月末、アメリカの機動部隊は沖縄諸島に猛攻撃を加え、四月一日、沖縄本島に上陸した。四月五日、航空兵力により沖縄周辺のアメリカ軍に特攻攻撃を加える菊水作戦が発動された。

四月八日、休暇で岐阜へ帰った近藤清は、岐阜商野球部を育てた遠藤健三を訪ね、無言のまま二人で長良川を歩いた。実家に帰り、母や姉らと短い時を過ごし、最後の写真を撮った。名古屋航空隊から第二国分基地へ移り、出撃直前、早稲田の学費を支弁していた姉に宛て遺書を書いた。そして四月二八日沖縄へと出撃した。

この日、菊水作戦を指揮する宇垣纏第五航空艦隊司令長官は、日記に次のように書いた。

「特攻も其の成果下火なるが如し。」(『戦藻録 宇垣纏日記』)

翌二九日、市島保男が鹿屋基地から出撃した。市島は四月二日に谷田部航空隊を立ち、鹿屋基地に着いてから出撃するまでの日々を日記に綴った。日記の末尾には、聖書の言葉が残されていた。

「人若し我に従はんと思はゞ己れを捨て己が十字架を負ひて我に従へ」(マタイ伝一六章二四節)

市島が最後に発した言葉は、「敵艦見ユ」(一七時四分)、「我敵艦ニ必中突入中」(二七時九分)の無電だった。

敗戦まで一〇〇日余りのことだった。

柳田喜一郎がどのような学生時代を送ったのか、わからない。今に残る彼の遺品は、前橋陸軍予備士官学校時代のアルバム、唯一冊だけである。その末尾には、墨痕鮮やかに次の言葉が記されている。

「憧れの南の国へ 美しき夢を懷いて 懐しの故国を去る

さらば父母よ 友よ 幸福あれ

喜一郎」

二〇一三年三月現在、早稲田大学の戦没者は四七三六名を数える。[※]うち学徒出陣以降の学徒の戦没者数は五〇〇名を超えると推定される。そして全戦没者の七割近くが、実に一九四四年以降に集中する。

※『早稲田大学百年史』第四卷（一九九二年）、および『早稲田学報』二〇〇五年二・三月号、二〇〇八年八月号までに掲載された、「早稲田大学戦争犠牲者名簿」による。本名簿の記載法は、教職員（元を含む）、校友（中退者および工手学校・高等工学校卒業生を含む）、在学生のうち、満州事変以降の戦没者を範囲とする。戦没者とは、旧陸海軍人の戦死・戦傷死・戦病死・不慮死・病死・事故死・殉職死、および非戦闘員の戦災死を指す。

〔展示資料〕

○中部軍教育隊書翰 吉村彦七宛

一九四四年一月二二日（消印） わだつみのこえ記念館所蔵

吉村彦七は息子友男が今、どの部隊にいるのか、中部軍教育隊に問い合わせた。教育隊からの返信の書面には所属

部隊名などとともに、南方方面軍の郵便は戦局の関係上途中停滞し、未着のこともあると記されていた。しかしこの書面を父が手にした時、すでに友男は戦死していた。

○日章旗

近藤幸義氏所蔵

近藤清に贈られた日章旗。双葉山、羽黒山といった横綱をはじめ、当時の人気力士の名が見える。

○近藤清書翰 野村少尉他一同宛

一九四五年四月 近藤幸義氏所蔵

「出発の折は心からの御見送り戴き感謝に堪えず。熱誠なる諸兄の御激励にも応へ得ず、不覚にも我等は未だ生きのびて居るが、闘志満々時機到来を待つてゐる。『明日ハ出撃』と言ふ日が何度も続けど、その場になって取止められ、元気のはけ口に困る位だ。…」

市島保男実妹談

一九四五年三月一日、外出許可された兄が突然、川崎の実家に戻ってまいりました。母と弟はすでに群馬に疎開しており、父は仕事で外出しておりました。兄は私に、「両親と弟に会わせて欲しいな」と申しました。そして三月一二日、両親と弟が土浦へ行き、兄と面会いたしました。この写真はその時に撮ったものです。兄は最後まで、両親をはじめ家族には、自分が特攻隊員だということを語りませんでした。しかし人に託して両親

の許に手渡された「最後の日記」には、克明にいろいろな思いが綴られていました。

○マフラー 市島保男着用

大学史資料センター所蔵

市島保男は飛行用マフラー（白羽重・大幅八尺）が手に入るようであれば送ってほしいと両親に手紙を出した（一九四四年一〇月一八日付）。すぐに用意し谷田部に送った母へ、市島は礼状を出した。「マフラーわざく／＼着物の裏を取って下さった由、誠に恐縮でその様な事迄なされる必要はありませんでしたが、有難く頂いて置きます。（マフラーは防寒、火災の時の防火、防塵、傷の応急処置、見張をしやすくする等々の為必要なさうです）」（一九四四年一月三日付）

○市島保男「日記」

大学史資料センター所蔵

一九四五年四月二日から二九日までの日記。
鹿屋基地での日々が特攻出撃直前まで綴られている。

○レンゲの花

大学史資料センター所蔵

特攻出撃直前の一九四五年四月二四日、市島保男が鹿屋基地付近で摘んだレンゲの花。市島はその日の日記に、次

のように記している。

「敵機動部隊未だ見えず。十一時より二時間待期。チャートにコースを入れたり、符号を調べたりし、何時でも出撃出来る準備をなす。只命を待つだけの軽い気持である。隣の室で『誰か故郷を思はざる』をオルガンで弾いてゐる者がある。平和な南国の雰囲気である。徒然なるまゝにれんげ摘みに出掛たが、今は捧げる人もなし。梨の花と共に包み、僅かに思出を偲ぶ。…」